

8. コロンビアへ！ 教えの伝播 2 「トゥマコと天理青年」

元天理教コロンビア出張所長
清水 直太郎 Naotaro Shimizu

前回（9月号）の「教えの伝播1」では、栽培されたバナナに焦点を合わせ、土地所「トゥマコ」をテーマとした。それを受けて今回は、「なぜ天理青年を派遣したのか」について資料から探りたい。

太田哲三氏の『コロンビアの日々』によれば、在コロンビア駐日大使の土屋氏は、日本とコロンビアの国交が回復し、移住を進めていた矢先に、トゥマコのバナナ事業のための出資者や人材を探していた。その結果、「1960年（昭和35年）、市村清氏が出資者となり、実際に移住する若者を募ることになって、その話が天理教に持ち込まれ、これを受けて、二代真柱様⁽¹⁾、天理高校2部の農事部の生徒から希望者を募ることになった。」

この文章の中で、「その話が天理教に持ち込まれ…」と記述されているが、この部分が少し気になった。

第2次世界大戦後、1954年（昭和29年）日本はコロンビア共和国と国交を回復した。当時、東京にあった「共栄貿易会社」の社長富谷政明氏は「コロンビアの国交が回復されるや、直ちにコロンビアのコーヒー云々」とある部分、そしてこの富谷氏が「具体的なバナナ園開拓（日本人移住）計画をたてた」という部分は、久保俊之⁽²⁾前コロンビア出張所理事長の資料「コロンビア50年伝道史1」から前回引用した。この資料にはまた、次のように記されている。

このような計画を元にして、日本側の出資者並びに独身青年の物色を始めた。当時コロンビア大使館に赴任していた松野臨時大使と相談の結果、出資者には、旧知であった三愛石油会社（リコー社長）の市村清氏に依頼することにし、早速市村氏に交渉したところ快諾を得たのが5月24日であった。また、開拓に要する独身青年については、着任早々の土屋準大使と相談したところ、同大使が懇意にしていた天理教の中山正善二代真柱に依頼してはどうかということになり、富谷氏は直ちに共同経営者のレオン・ノーベル氏を同道して上記の市村清氏並びに天理教の二代真柱を訪問し、事業についての説明を行った。時は1960年7月の中頃であった。⁽²⁾

この文章中にある「同大使が懇意にしていた天理教の中山正善二代真柱に依頼」という部分について、2代真柱と土屋準元コロンビア大使の接点はどこあるか、と疑問に思って調べたが、わからないままであった。しかしながら、2代真柱は東京帝大を1929年に卒業されているが、土屋氏は東北帝大を1930年に卒業している。土屋氏はその後、米国勤務など外務省一筋の人生であり、1954年～57年には在ニューヨーク日本総領事、1957年～61年の4年間コロンビア全権大使として公務している。⁽³⁾あくまでも推察の域を出ないが、同世代であり、土屋氏の外務省勤務や外交官時代に接点があったのではないと思われる。

コロンビアへの扉

コロンビアに渡った17名の「天理青年」たちは、トゥマコバナナ園開拓に命をかけたが、気候や資金などの諸事情で1963年にいずれも退職した。その中で帰国者は6名、コロンビアに残った者は11名であった。

その後、彼ら天理青年の伏せ込んだ「ものだね」が、芽を出して育ち、2代真柱をはじめ、歴代の真柱や教会本部の支援と「親心」を受けて、壮絶な且つ素晴らしいコロンビアの道が繰り広げられることとなる。そうして天理教の「コロンビアの扉」が開か

れたのである。その詳細は、太田哲三初代コロンビア出張所長著『コロンビアの日々』に委ねたい。今日、3つの教会と数カ所の布教所が存在する。「天理青年」の家族を除けば、信者はほとんどコロンビア人である。

トゥマコ—有数の危険な地域

ところで、トゥマコの正式名称は「サンアドレス・デ・トゥマコ」という。湿度が高い熱帯性気候である。コロンビアの南西に位置し、エクアドルとの国境近く、ナリーニョ県の県庁所在地パストから300kmの距離がある。トゥマコは28度～35度、年間平均湿度は約85%である。人口は現在25万人ほどであるが、人種構成が他の地域と著しく異なり、メスティソ（白人＋先住民）と白人は6.1%だけだが、黒人とムラート（白人＋黒人）を合わせると88.1%、先住民は5.1%となっており、ほとんど黒人系で占められる（コロンビア全体ではメスティソが50.3%、白人が26.4%）。⁽⁴⁾

トゥマコは、通称「太平洋の真珠」と呼ばれた風光明媚な自然に囲まれた穏やかな地域だった。だが、1990年あたりから様子が劇的に変化する。コカ栽培が始まり、またゲリラ（ELN民族解放軍とFARCコロンビア革命軍）がこの地域に入り込んで、2000年ころから急激に危険地帯化する。それによりこの地域は貧困、公共施設や教育不足、徴兵、強制移動難民などの原因もあり、殺人が多発している。現在でも治安がすこぶる悪いトゥマコ地域である。

トゥマコ訪問記

バナナ園「市村農場」は、トゥマコから約50数キロ内陸に位置するEspriella（エスプリエジャ）という村からさらに少し内陸に入る。エスプリエジャは少しの商店や教会などがある集落である。2016年3月、筆者がコロンビア出張所長時、意を決してトゥマコに行った。空路ではなく、陸路だった。出張所の行事に参加していた信者の親戚がトゥマコに居住していたので、その信者と一緒に18時間超（午後7時にカリ発、トゥマコ着は翌日の午後1時半）を費やして無事到着した。当時のバナナ園農場長の富谷典明氏（86歳）⁽⁵⁾に農場跡地を案内してもらった。農場では当時のお手伝いさんの娘が同じく家政婦として、富谷さんをお世話されていた。富谷氏はここで椰子とカカオを栽培していた。

2代真柱は1961年（昭和36）と1963年（昭和38）、トゥマコを訪問されているが、宿泊された建物はすでになかった。富谷氏は「ここらへんだったね」と述懐された。コロンビアの扉が開かれたのはカリ市ではなく、2代真柱が訪ねられたこのトゥマコ、エスプリエジャだと筆者は思っている。当時の天理青年たちが実施したかどうかかわからないが、筆者はトゥマコの市街地でおさづけ（天理教の病人に対する祈り）を取り次ぎまくった。次から次と褐色の人たちが願い出てきた。終了後、なぜか涙が止まらなかった。（完）

〔註〕

- （1）太田哲三『コロンビアの日々』（天理大学出版部、1988年）、3頁。
- （2）久保俊之「コロンビア50年伝道史1」
- （3）<https://ja.wikipedia.org/wiki/土屋準>
- （4）https://es.wikipedia.org/wiki/Etnografia_de_Nariño
- （5）プロモータの共栄貿易会社社長富谷政明氏の長男、メキシコ生まれ、2023年没。